

飯島勅作 「まことの勝利者」

岡田勝の父 父さんが今日の聖書箇所を読むから、よく聞いていなさい。母さん、今日の箇所はどこだったかな？

母 今日は、新約聖書使徒の働き 7 章 54 節から 60 節ですよ。

父 そうか。えー、使徒の働きの 7 章…。(FO)

聖書朗読 「人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりした。しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。『見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』人々は大声で叫びながら、耳を覆い、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。『主よ、この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、眠りに就いた。」

父 勝、今日はお前がお祈りしなさい。

勝 (たどたどしく)天のお父様、今日の聖書の言葉をありがとうございます。このステパノのように、たとえ人々の誤解や迫害に遭っても、勇敢にイエス様をあかすことができるように、今日一日、わたしたちを導き、かづけ、そして助けてください。

父、母、勝 アーメン。

勝 じゃ、行ってきます。

父 勝、父さんも駅まで一緒に行こう。

母 行ってらっしゃい。お二人とも、今日も一日、元気で頑張ってくださいね。勝さん、学校で空き時間があったら、聖書を読むのよ。

勝 (あまり気がなさそうに)う、うん。

ナレーション 岡田勝は青春中学 2 年生。クリスチャンの両親の元で、聖書と祈りの中で育てられてきたのですが、中学も 2 年に上がったころから、次第に聖書の教えと現実の自分の生活に隔たりを感じるようになりました。頭の中では、知識としてよく覚えてはいても、それが彼の心や行動を導く力にはなっていなかったのです。そんなある日、彼を根底から揺り動かす事件が起きました。――

(効果音) (始業のベル)

先生 さて、今日から進化論の勉強に入る。教科書では 61 ページだ。ところでみんなは“進化”という言葉聞いたことがあるかな？それを簡単に説

明すると、こういうことだ。…すべての生物というのは、最初から今ある姿をしてたのではなく、長い歴史の中で、体の仕組みが簡単なものから複雑なものへと進化し、生活している場所に、より適した仕組みに変わってきたものであると考えられる。このような変化を“進化”と呼んでいるわけだ。現在地球上に生活している多くの生物は、すべて進化の結果できたものと考えられる。人間を例に取れば、人間も昔からこのような姿をしていたのではないのだ。

さて、これに真っ向から対立するのがキリスト教の創造論だ。えーと、確かこのクラスに教会に行っているのがいたな。えー、岡田勝。お前、確かクリスチャンだったな。岡田！

勝 ……。

先生 岡田、いるなら返事しろ。

勝 は、はい！

先生 お前は聖書を信じているんだったな。お前の信じている創造論を、みなに分かるように説明してみろ。

勝 は、はい。えーと、聖書の記事によれば、創世記というところに、「初めに神が天と地を創造した」とあります。この宇宙のすべてのものは、神がおつくりになりました。人間は、初めから人間としてつくられました。

男子 質問！ この科学の時代にナンセンス。この世に創造者がいるという証拠が、どこにあるんだよ？

女子1 そうよ。それに比べて進化論には、それを支える無数の証拠が発見されてるのよ。

女子2 偶然に、この世に存在を始めた物質が進化を重ね、今日の姿となったのだと思います。今でも進化は続いていると思います。

先生 岡田、どうだ？ 答えてみろ。

勝 えー…。

男子 この世に神なんているもんか。創造者がいるなんて聖書の記事は、人間が勝手に考え出したおとぎ話の神話さ。

勝 でも、聖書には…。(言葉に詰まる)

先生 岡田、答えられないのか？ お前、それでも教会に行っているクリスチャンか。確か、お父さんもお母さんも教会に行っていると聞いたが。自分の信じていることについて、もっとしっかり勉強する必要があるな。そうでないと、お前の神様が悲しくて、お泣きになるぞ！

先生・生徒 (一斉に笑う)

勝(モノローグ) うー。畜生！

ナレーション 勝の心の中は、悔しさでいっぱいでした。聖書に書かれている創造の事実を正しく説明できなかった自分への腹立たしさと、先生やみんなにバカにされた

ことへの激しい屈辱感でした。その日の放課後——。

- 男子 岡田、お前、教会に行っているのかよ。ちーっとも知らなかったわあー。
- 女子 1 アーメン、ソーメンの牧師様、教会に行ってるして、何かよいことでもございませるかー？
- 勝 やめろよ、そんな言い方。
- 男子 お、牧師様もお怒りになる。忍耐、忍耐。クリスチャンは博愛主義じゃなくちゃね。
- 女子 1 さあ、早くおうちへ帰って、学校の成績でもよくなるように神様にお祈りでもしなさいよ。
- 男子 それにさあ、「神様、大好きな純子さまが、もっと優しくわたしを愛してくれるように」ってな。(笑い)
- 森沢純子 (遠くから近づいて) やめなさいよ、あんたたち。岡田君がかわいそうじゃない。あんたたちこそ早く帰って勉強しなさいよ。岡田君が成績がいいからって、ねたんでいじめてるのでしょう。岡田君のつめのアカでももらって、せんじて飲んだらどう？
- 男子 チェッ。純子様のお出ましか。邪魔が入ったから帰ろう、帰ろう。
- 女子 1 あとはお二人で仲良くどうぞ。
- ナレーション 中に入ってくれたのは、同じクラスの森沢純子でした。今はテニス部の部活が忙しくて行っていませんが、中学に入るまでは、勝と同じ教会の教会学校に通っていた純子は、クラスの中でいつも勝のよき友でした。彼女との語らいに、心の和むのを覚えながら、家に帰る途中——。
- 男子 おい、岡田！
- 勝 あ、君たちか。な、何か用かい？
- 男子 「何か用か」はねえだろう。先ほどは、よくもかわいい純子の前で恥をかかせてくれたなあ。
- 勝 そ、そこをどいて行かせてくれよ。
- 男子 おっとっと。そうはいかねえよ。クリスチャンは暴力は使わねえっていうじゃねえか。ほんとかどうか、岡田、おれたちがお前をテストしてやるよ。それー！
- (効果音) (勝のカバンをひったくる)
- 勝 な。何をするんだ。やめろよ。おれのカバン、返せよ。
- 女子 1 返してほしかったら腕づくで来たら？
- (効果音) (3人でモミ合ううちに、カバンの中身が道路にバラバラ落ちる。)
- 男子 お、なんだよ、この分厚い本は？ ははあ、これがお前の信じている聖書ってやつか。
- (効果音) (男子 1、拾い上げ、中を開けて読み始める。)
- 男子 えー、「初めに神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが、

大いなる水の上にあり、神の霊は、水の上を動いていた。…」なんだ、これは？ ははあ、これがお前がさっき授業中に言っていたことか。アホらしい。お前、こんなおとぎ話信じているのか？

- 女子 1 岡田、あんたの秀才が泣くわよ。
- 勝 畜生。その聖書、返せ！
- (効果音) (奪おうとして、聖書が裂け、地面に落ちる)
- 勝 あ！ 聖書。僕の聖書が…。
- 男子 なんだ、こんなもの。こうしてやる。この聖書がお前を狂わせている。
- (効果音) (男子 1、聖書を踏みつける。)
- 勝 よせ、よせ。あ、あー、やめろ！
- 女子 1 寄るな！
- (効果音) (男子 2、勝を突き倒す)
- 勝 あー！
- (効果音) (勝、道路際の塀にぶち当たる)
- 勝 い、痛っ！(額から血が流れる)
- 男子 お、おい、ヤベえぞ。逃げよう！
- 勝 畜生！
- ナレーション ヨロヨロ立ち上がった勝の手に、額から血が流れ落ちました。
- 勝 やってやる、やってやる！
- ナレーション 体を突き抜けるような怒りに我を忘れた勝は、そばにあった棒くいを力任せに引き抜くと、彼らの跡を追おうとしました。その時です。今朝読んだ聖書の言葉が突然よみがえってきたのです。
- 声(男) (エコー)こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んでこう言った。「主イエスよ、私の霊をお受けください。」そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」
- 勝(モノローグ) ステパノは赦したのか?! だけど、僕は赦せない。そんなのイヤだ、絶対！僕が受けたこの惨めな敗北感、胸の中の煮えたぎるような憎しみ。この思いを一体どうしたらいいんですか、神様？ 僕はステパノじゃない！ だけど、どうしてステパノには赦すことができたんだろう？
- 声(女) (エコー)それは、ステパノ自信がかつてイエス・キリストによって赦されたからです。ほかならぬ自分自身が罪びとであることに気づき、その罪をキリストの十字架で赦された者だけが、人を本当に赦すことができるのです。
- 声(男) (エコー)キリストの赦しの愛を受けなさい。その時、あなたも本当の勝利とはなんであるか、分かるだろう。力をもって自分を苦しめ、痛めつけるその相手を、ステパノのように真に赦せる人こそ、本当に強い人、まことの勝利者なのだ。
- ナレーション 勝の心は、額や体の節々が痛むたびに、なおも怒りにうずきました。しかしそ

の彼を今、“イエス様が身近にいる”という、今まで味わったことのない不思議な思いが、強く捕らえていました。引き裂かれ、泥にまみれた聖書を握り締めながら、彼は心の中で、「まことの勝利者」と何度もつぶやいたのです。――

<完>